WWW
WORLD WRIST WATCH

CONTENTS／1

WORLD MOOK
ワールド・ムック…1136
平成29年1月20日発行（通巻1136号）
世界の腕時計
No.130

013 編集長独白

015 表紙の時計／ショパール〝LUC XPS 1860〟

017 Editor's Choice!
ブルガリ〝セルペンティ インカンターティ トゥールビヨン〟／ヴァシュロン・コンスタンタン〝ヒストリーク・アメリカン 1921〟／
オーデマ ピゲ〝ミレネリー〟／カルティエ〝ドライブ ドゥ カルティエ〟／ジャケ・ドロー〝グラン・セコンド デュアルタイム〟／
グラスヒュッテ・オリジナル〝セネタ・エクセレンス〟／オメガ〝コンステレーション スモールセコンド〟／ブランパン〝オーシャン コミットメント Ⅱ〟／
ハリー・ウィンストン〝プロジェクト Z10〟／ウブロ〝クラシック・フュージョン ベルルッティ スクリット〟／H.モーザー〝パイオニア・パーペチュアルカレンダー〟

028 世界は時計で回っている。

030 ヴァシュロン・コンスタンタン──築いたものを進化させ、次世代に向けて充実を図る
新作コレクション

034 ブルガリ〝オラ ドムス〟──〝遺産〟に敬意を表して、進化を遂げたワールドタイム

036 モリッツ・グロスマン
〝ベヌー・ピュア ジャパンリミテッド〟──日本の時計愛好家のためにデザインされた限定モデル

038 MB&F
〝ホロロジカルマシン No.8 カン・ナム〟──少年の日の夢を時計に託して誕生したドライバーズ・ウォッチ

040 パテック フィリップの2016年新作──細部にアレンジを加え、着実に歩を進める名門

046 オーデマ ピゲ
〝ロイヤル オーク コンセプト スーパーソヌリ〟──クリアで美しく、大きく響く音を目指した意欲作

048 ヴァン クリーフ&アーペル レディアーペル〝ジュール・ニュイ・
フェ・オンディーヌ・ウォッチ〟&〝ロンド・デ・パピヨン〟──複雑機構を夢の語り部にしたジュエリー・メゾンの発想

050 グルーベルフォルセイ
〝パーペチュアルカレンダー・イクエーション〟──超複雑時計開発にみるグルーベル・フォルセイの真価

052 ジラール・ペルゴ
〝コンペッツィオーネ・コレクション〟──モータースポーツの熱狂を思わせるクロノグラフ誕生

054 ディオール──オートクチュールメゾンの創造力が生み出す麗しき時計たち

059 ボーム&メルシエ
〝クリストン パーペチュアルカレンダー〟──複雑機械式時計の魅力をフレンドリーな価格で提供

060 モンブラン 2017年新作プレビュー──ヴィンテージ風がモンブランの新しい顔を作る

061 20周年を迎えた
ショパール
マニュファクチュール
独立を保ち、未来を築くための努力と軌跡
ショパールが自社ムーブメント製造のための〝ショパール マニュファクチュール〟をスイス・フルリエに
創業して今年で20年が経過した。この20年の歩みをLUCコレクションの時計を通して見てみたい。

074 ショパール LUC パーペチュアル・クロノ──万を持して登場したコンプリケーション・ウォッチ

077 ジャケ・ドロー
機構と装飾工芸にみる遺産の継承

WWW WORLD WRIST WATCH

CONTENTS／2

086 アーノルド&サン／アンジェラス
「温故知新」を柱にブランドを築く

093 ルツェルンにクロノスイス・ハウスを訪ねて
創業者が築いた土台の尊重と継承

100 ファーブル・ルーバ
再スタートを切ったダイバーズ・ウォッチの先駆者

104 カシオ〝GPSハイブリッド電波ソーラー OCW-G1200&OCW-G1200D〟
アナログ的な作業が生み出す最先端時計の価値

106 セイコー〝グランドセイコー・スプリングドライブ8DAYS〟
ロングパワーリザーブと重量感が魅力のGS誕生

108 新製品情報

113 ユリス・ナルダン〝ダイバー クロノグラフ アルテミス レーシング〟
マリンクロノメーターの歴史を背景にアメリカズカップで海に挑戦

114 カルティエ 銀座ブティック
フランスの様式に日本文化の香りが溶け込んだ閑静な空間

115 ピアジェ 銀座本店
銀座・中央通りに移転し、ピアジェの〝ラディアンス（輝き）〟の世界を表現

116 グラスヒュッテ・オリジナル&ジャケ・ドロー ジョインとブティック
時計を巡る異なる世界観の対照と調和

118 ジャガー・ルクルト フラッグシップブティック
マニュファクチュールの世界を伝える日本初のブティックがオープン

119 ロレックス ブティック 六本木ヒルズ
落ち着きあるゆったりとした空間でロレックスの世界に浸る

120 日新堂 銀座本店
時代と調和し、新たなコンセプトで展開を始めた老舗時計店

121 パネライ〝スライス・オブ・タイム〟
時間の流れとともに姿を変えた〝抜け殻の時計〟

122-128 インフォメーション／問い合わせリスト／次号予告

本文中の価格は平成28年11月30日現在の消費税込みの総額表示です。

ヴァン・クリーフ&アーペル レディアーペル〝ジュール・ニュイ・フェ・オンディーヌ・ウォッチ〟&〝ロンド・デ・パピヨン〟

複雑機構を夢の語り部にしたジュエリー・メゾンの発想

ヴァン・クリーフ&アーペルは創業100周年を迎えた2006年、腕時計で表現する〝詩的な〟世界という新しいコンセプトを打ち出した。複雑なメカニズムが可能にする、文字盤を舞台に繰り広げられるロマンティックなストーリー、それはわれわれに夢を与えてくれる。

時計の文字盤やケースをあたかも無限のカンバスに喩え、ヴァン・クリーフ&アーペルが考案した〝詩的〟な世界をそこに描き出した〝ポエティック・コンプリケーション〟は、今年で10年目を迎えた。妖精やダンサー、あるいは恋人たちがダイアル上で見せてくれる踊りや仕草は様々であるが、名称が示すとおり凝ったメカニズムや複雑な機構を駆使したその時計たちは、われわれにある種の夢を与えてくれる楽しいコレクションでもある。

今年もまた幾つかの魅力的なモデルがこのポエティック・コレクションに追加されたが、ここでは女性用のレディアーペルの中からふたつのモデルをピックアップしよう。ひとつは、スイレンの葉の上に座した妖精の1日を描いた〝ジュール・ニュイ・フェ・オンディーヌ・ウォッチ〟である。この新作は、2005年に登場したジュエリー・ウォッチ、〝真夏の夜の夢〟の有名なフェアリー（妖精）の流れを汲むもので、背景となるディスク上に置かれた黄色い太陽と白い満月が刻々と移動することによって、長短針だけではなく身近な天体を使って時の流れを感じさせてくれるのが特徴である。言うまでもなく、その24時間でぐるりと1周するディスクは、これまでに幾度となく同コレクションで使用されたメカニズムを流用したものだ。いっぽう、マザー・オブ・パールのディスク上にセットされた太陽と月は、それぞれイエロー・サファイアとダイアモンドでできており、さらにジュエリー・ウォッチに相応しく各所にはミニアチュール・ペイントやシャンルベ・エナメルに加えてダイアモンドやガーネットなどの宝石がちりばめられる。

ダイアモンド・ベゼルを嵌め込んだケースは直径38㎜の18Kホワイトゴールド製で、このほかにもクラウンやピン・バックルにもダイアモンドがセットされる。搭載ムーブメントは自動巻きのヴァルフルーリエ800Pにモジュールを載せたもので、25石、2万1600振動、パワーリザーブ約60時間のスペックをもつ。

残りのひとつは、2016年モデルの白眉でもある〝ロンド・デ・パピヨン〟である。この新作ウォッチをひと口で述べるならば、雲の合間を飛び交う3頭のパピヨン（蝶）の翅先と、ツバメの羽根先で時刻表示を行うユニークな腕時計と言うことができるだろう。

特徴的なこのギミックは、レトログレード&フライバックで作動するツバメの羽根が〝時〟を受け持ち、同じく雲間からバトンタッチ式に次々と姿を表す白、黄、赤のパピヨンの翅が、それぞれ順に0～30、30～45、45～60の〝分〟を担当する。驚くべきはパピヨンの動きで、そのメカニズムにはバリアブル・スピード・ミニットと呼ばれる機構が組み込まれており、それぞれが舞うスピードが変化することだ。嬉しいのはオンデマンド・アニメーションと名付けられたモジュールを内蔵することでだ。それは、7時半のプッシュ・ボタンを押すことで、約10秒間かけて3頭のパピヨンが次々に舞い踊る、実に楽しい仕組みである。いっぽう文字盤と異なる高さにセットされた雲はMOP製で、各部にミニチュアチュールなどの技法が使われる。

ジュール・ニュイ・フェ・オンディーヌ・ウォッチと同様、ダイアモンド・ベゼルを装備したケースは直径38㎜の18Kホワイトゴールド製である。これに搭載されるムーブメントは、ヴァルフルーリエQ020をベースに、スペシャル・モジュールを組み合わせたもので、スペックは50石、2万8800振動、パワーリザーブ約40時間と発表されている。

これまでにも何度となく述べているが、両者の38㎜と言うケース・サイズは、ストラップを付け替えることで男性も使うことができる。もちろん、ベゼルにセットされたダイアモンドゆえ、場所と時間は限られるものの、この楽しい時計を女性だけのものにしておく手はないと思うのだが、いかがなものだろう。

ディオール

オートクチュール メゾンの創造力が生み出す麗しき時計たち

ディオールではオートクチュールの作品から発想したユニークピースを毎年、バーゼルワールドで発表している。繊細な刺繍やプリーツなどに着想を得て、手作業による細工を凝らした時計には、オートクチュールならではの創造性が表現される。

2013春夏のオートクチュール・コレクションでは職人の手仕事による繊細な刺繍で全体を飾り、霜や冬の花を表した可憐なドレスが発表された。

「ディオール ユイット グランバル ジャルダン ディヴェール №11」。直径36㎜の18Kホワイトゴールドのケースに自動巻きのCal.Dior Inverse 11 1/2（28石、毎時２万8800振動、パワーリザーブ約42時間）を搭載する。ベゼルに332個のダイアモンドをセットする。メタリック・レザー・ストラップ。ブラックのサテン・ストラップを付属する。価格2138万4000円。１点製作。

ディオール ユイット グランバル ジャルダン ディヴェール

〝ディオール ユイット グランバル〟は2012年に始まるコレクションだが、2014年のバーゼルワールドでは「霜が降りて凍った冬のガーデン」をテーマにした全4点が発表された。文字盤全面はダイアモンドやサファイアがスノウセッティングで敷き詰められ、そのうえで繊細な細工のローターが回転し、花に積もる雪と雪の結晶に反射する太陽の光が表現された。

ローターのベースはゴールドで、それぞれのパーツを切り出し、ペイントで彩色した後にカットしたオパールやマザー・オブ・パールを重ねる。また石をセットし、最終的にすべてのパーツを組み合わせて作られる。ローターにはゼンマイを巻きあげるために十分な回転ができる重量が不可欠であることはいうまでもない。〝ジャルダン ディヴェール〟では美しく、そして機能するローターの開発に約18カ月が費やされたという。

Photo/Yoshihisa Kumagai（時計）　Courtesy of Dior　Text/Tomoko Kayama(WPP)

20周年を迎えたショパール マニュファクチュール

独立を保ち、未来を築くための努力とその軌跡

ショパール共同社長のカール-フリードリッヒ・ショイフレ氏が、〝LUC〟プロジェクトの最初のムーブメントを発表して20年が経過した。この間に11のベース・ムーブメントが誕生し、およそ70にまでそのバリエーションを広げた。そして20年目の今年はバーゼルワールドから11月にかけて、永久カレンダー・クロノグラフやミニット・リピーターを発表した。この20年間の歩みを見てみたい。

Photo/Toshiaki Miyamoto, Courtesy of Chopard　Text/Tomoko Kayama(WPP)
Special thanks to Ms. Kayoko Miyakubo

ジャケ・ドロー

機構と装飾工芸にみる遺産の継承

今日のジャケ・ドローはピエール-ジャケ・ドローの遺産に立ち返った興味深い開発を行っている。オートマトンを現代に甦らせ、エナメルや彫金細工などの工芸技法に力を入れ、機構と装飾の両面でそれを見ることができる。２０１０年には工房を新設し、独自性の追求がさらに深められた。

Photo/Toshiaki Miyamoto　Couresty of Jaquet Droz(P81/時計,P84)
Text/Tomoko Kayama(WPP)　Special thanks to Ms. Masami Nakamura Füeg

アーノルド&サン／アンジェラス

「温故知新」を柱にブランドを築く

Photo/Toshiaki Miyamoto(P85-P87,P92) Text/Tomoko Kayama(WPP)
Special thanks to Ms. Masami Nakamura Füeg

ルツェルンにクロノスイス・ハウスを訪ねて

創業者が築いた土台の尊重と発展

クロノスイスと聞けば、ゲルト・R・ラング氏を思い出す人も多いだろう。クロノグラフのコレクターとしても知られたラング氏は機械式時計復興に自らの夢を賭けたひとりだった。その彼が1983年に創業したクロノスイスは、現在、新たな扉を開き、次世代に向けてブランドを育てる努力が続けられている。彼らの現在を取材した。

「シリウス フライング・レギュレーター マニュファクチュール」。2016年の新作。直径40㎜のSSケースに自動巻きムーブメントのCal. C122（エニカ製ムーブメント・ベースに自社開発のモジュールを付加。30石、毎時2万1600振動、パワーリザーブ約45時間）を搭載する。価格119万8800円。

Photo/Masakuni Miyasaka(WPP/P93) Toshiaki Miyamoto(P94,P96-P99)
Courtesy of Chronoswiss(P95,P100) Text/Tomoko Kayama(WPP)

ファーブル・ルーバ

再スタートを切ったダイバーズ・ウォッチの先駆者

1737年創業、世界で2番目に古い歴史を持つ時計ブランド、ファーブル・ルーバが新体制となって、日本にも改めて上陸を果たした。その長きにわたる歴史を概観しつつ、最新コレクションの魅力を解き明かす。

文／松阿彌 靖　写真／熊谷義久（P102-103）　ファーブル・ルーバ・ジャパン

ラ・ショー・ド・フォンの時計博物館が所蔵している、創業者アブラハム・ファーブルのサインが入った懐中時計。1780年頃に製作されたものと思われる。彼は、16歳で時計職人の見習いとなり、35歳を迎える1737年に自身の工房を開設したことが公式文書として残されている。1790年に88歳で生涯を閉じており、この懐中時計は晩年近くの作と言える。

1737年、スイスはル・ロックルの地で小さな時計工房が産声をあげた。創業者はアブラハム・ファーブル。今から279年前といえば日本では8代将軍徳川吉宗の治世。それを思うと、長い歴史が実感できるかもしれない。

1749年には〝ル・ロックルの熟練時計職人〟に選定されるほど優れた技術の持ち主だった。以降、息子、孫へと家業は順調に継承され、4代目アンリ・アウグストゥスが1815年に、トラヴェール渓谷の時計製造業者アウグストゥス・ルーバと提携。アンリ・アウグストゥスは販路拡大に尽力し、ドイツ、ロシア、キューバを経由しアメリカはニューヨーク、さらにブラジル、チリにまで足を運んでいる。

その息子、フリッツ・ファーブルは1855年に、アデル＝ファニー・ルーバと結婚し、ファーブル・ルーバ姓を名乗ることに。父が推進した海外販路拡大路線を継承し、ヨーロッパ、アメリカ、さらにアジアにも進出。中でもインド市場で大きな成功を収めていく。

20世紀に入り、腕時計が懐中時計に取って代わる流れの中、1925年には早くもモノプッシャークロノグラフを発表。第二次大戦後には、インド・ムンバイ支店の好調を支えに困難な時代を乗り越え、1948年にはヌーシャテル州気象台から正確性を評価され、最優秀賞を授与されるなど、技術面でも評価を高めていく。

1950年代から70年代にかけて、ファーブル ルーバは、その存在感を大いに示すことになる。1955年に、50時間パワーリザーブの自社製キャリバーFL101を完成させ、これを搭載した『スカイチーフ』『シーキング』『シーライダー』を相次いで発表、大きな人気を博すことに。その後も立て続けに自社製キャリバーを開発。1960年には、史上初のダイバーズウォッチ『ウォーターディープ』を世に送り出す。62年にはツインバレル式で50時間のパワーリザーブを持つ、厚さ2・98㎜の超薄型キャリバーFL251を搭載した『シーキング・ツインパワー』、さらに、アネロイド気圧計を搭載した『ビバーク』を発表。気圧と高度計測が可能な史上初の腕時計として話題をさらい、数々の登山家、冒険家の偉業達成を支えることとなった。

68年には水深計を搭載した『バシィ』を発表。また他に先駆けツインバレル式自動巻きキャリバーも完成させている。70年代に入って、毎時36000振動のハイビートキャリバーを搭載した『シーレイダー』や、自動アラームを搭載した『メモレイダー』、ダイバーズウォッチ機能とクロノグラフを兼備した『シースカイ』などを発表し、海や空を意識したスポーツウォッチカテゴリーでリーダー的なブランドとなっていった。

クォーツショックの時代以降、8代続いたこの名門も苦境に立たされ、何度か所有者が変わる中で存在感が薄れていったが、2011年、インドの財閥タタ・グループの傘下となり、復興プロジェクトがスタート。インドとの絆がこのブランドを改めてウォッチシーンの前線に押し上げる形となった。掲げるスローガンは〝フロンティアへの挑戦〟。自社のアーカイブからのインスピレーションに、独自の改革を加えた新コレクションを発表し、今年10月には満を持して日本市場への復帰も実現した。